

AsiaWave

 vol.165

5

特集

ミャンマー・
レポート

福田美鈴

ミャンマー見聞録

祖究

ミャンマーの
サイクロン被害

2

チベット写真館

秋山雄一

4000km バスの旅

②

9

フォト・レポート

田村怜奈

ラオス・
パーナム村の
学校



12

Life&Culture

イスラムについて学ぶ子供たち

ラフマン・愛

ラオスの水かけ祭り

中園タクヤ

地震に思うこと

孫秀萍

タイ市場

村田広幸

映画『闘茶』

『闇の子供たち』

亞洲奈みつほ

ミャンマー

サイクロンが直撃、13万人の

死者・行方不明者

中川昌俊

カイルスの親子

(秋山雄一撮影)

どんなところかも知らずにカイルスを一周した。夜になってわかったことは、宿がないこと、食事を提供してもらえない店がないこと。

カップラーメン用にお湯を沸かしてもらった。雨が漏れる納屋を貸してもらい寝床とした。

翌日は寝不足と疲れから足は重く、何度も休憩を取りながら歩いた。

そんなひと時に同じくカイルスを廻っている親子にあった。

言葉は通じないが、写真を撮らせてもらった。



秋山雄一の
チベットの写真館

4000km バスの旅
その2



きれいなアスファルトがあるとは思って
いなかった。

ただ川で押し流されたり、崩れたり、大
きな穴が開いているとも思わなかった。

舗装している道など世界では稀なのでは
ないか。

日本はなんでも特別なんだろう。

その特別を当たり前に思っていると世界
を知らないだけではなく、
当たり前と思いつけることで感謝を忘れ
てくる。

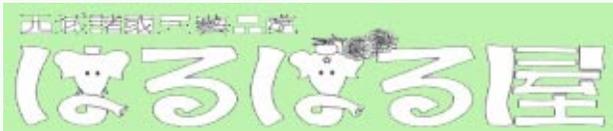
バスが1Kmスムーズに進むと感謝する、
そんなバスの旅だった。

PHOTO SALON





インド・ネパール・アフガニスタン・バリなどなどからはるばるやってきた衣料品・織物・アクセサリ・楽器・CD・DVD、、、が皆様をお待ちしております



<http://www.harubaruya.com/>

180-0004 武蔵野市吉祥寺本町 1-8-3 コスモビル 2階

Phone & Fax. 0422-21-4790

渋谷アムリタ Phone & Fax. 03-3461-6563

吉祥寺別館 Phone & Fax 0422-22-2433

☆はるばる屋通信☆

インド・バリからオリジナル春物衣料品
タイの衣料品 雑貨続々到着中です！！

6/14.15 BANGLADESH FESTIVAL
に参加します

★ 軽井沢店オープンしました ★
ただし、連休後、7月までは土、日だけ営業します

ベリーダンス、インド舞踊のイベントに
商品を持って参加いたします。ご連絡ください。

ネットでのお買物もお楽しみください！



秋山雄一のホームページ：

<http://www3.point.ne.jp/~akky/>
<http://hey.to/akky>

ミャンマー見聞録

文・写真 福田美鈴

私がミャンマーと関わるようになったのは、54才にして静岡大学大学院に社会人入試で入ったことに始まります。ここに留学していたヤンゴン外国語大学日本語科教員の彼女との交友からです。彼女は日常会話に不便はありませんでしたが、日本人の院生と肩を並べて本居宣長の古文を読むのは並大抵のことではありません。若い院生は自分の論文で手一杯ですから、留学生の手助けまでできないので、自然に私が留学生のお手伝いをするようになりました。

修了後数年を経てヤンゴン外国語大学日本語科の大学院設立の計画がでて、スーパーバイザーとしてヤンゴンに來ないかと誘われました。が、かの国は外国人には異常に警戒心があり、入国ビザが下りないのです。唯一当大学に日本人ボランティアを送り込んでいるNPOが東京にあります。五十嵐先生もその講師をされていますが、昨年12月下旬にそのNPOを通して派遣されました。

昨年の事件以来大学は休校でしたが、今年1月21日(月)に突然始まりました。その始まり方がなんともミャンマーらし

いのです。20日(日)の新聞に掲載されたのです。私は前日にミャンマー人の同僚に聞いていましたが、同じ寮に住んでいる中国語科の中国人先生は出勤して初めて知り、そこで教科書をもってすぐに授業をしたそうです。それまでにも、私は「朝令暮改」という言葉はこの国のためにあるのだらう、と思う体験を毎日していました。ミャンマー人の日本語科の先生方にこの言葉をお教えしたら「いえ、それは違います。朝令昼改、昼令暮改、暮令朝改です。」とおっしゃるのです。真に納得でした。そういうわけで当然未だに大学院なんてできていません。

授業は社会人クラス2コマと学部学生の作文教育4コマと教員の授業2コマです。社会人クラスは午前7時から8時40分です。教員も大変ですが、学生もそのあと出勤するわけですから、かなりの強い意志が必要です。

内容は社会人クラスと教員は「上級日本語」の教科書にある万葉集と古今和歌集です。日本の中学生が勉強しているようなことですが、古文の文法は省略しています。和歌の心を感じてもらおうこと

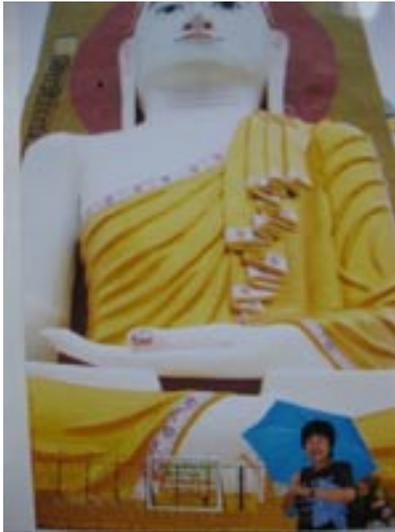
と、日本の文字が中国の借り物から始まって、平安時代に日本独自の文字が考案され今日に伝えられているということなど、すべて日本語で講義するわけです。学生にとってはかなり負担が大きいと思います。しかし日本人の自然な日本語を聞く機会の少ない環境ですから、溢れるほどの自然な日本語を聞き取ろうとすることだけでも効果があると思っっています。現に3ヶ月で「初めは聞き取れなかったのが、今はかなり分かるようになりました」という感想文がたくさんありました。ミャンマー人の先生が細かい文法を丁寧に指導していただきますので、日本語教育に素人の私は、日本語のシャワーとすることに徹しています。

ミャンマーでは小中高校で音楽や体育の授業はないそうです。でも民族舞踊や歌は、生活の中に自然にあるようでもなさん上手です。そこで私の日本語教育も、なるべく日本の歌を教えて差し上げようになっています。万葉集や古今集の歌に通じる現代唱歌を探して歌っています。「田子の浦に打ち出てみればま白にぞ富士の高嶺に雪は降りける」の赤人の歌には、「ト頭を雲の上に出し、波よる山を見下ろして、雷さまを下に聞く、富士は日本一の山」となります。その他「久方のひかりのどけき春の日にしづこころなく花の散るらん」には「トさくらさくら 弥生の空は 見渡す限り……」とか「花の色は移りにけりないたづらにわがみよにふるながめせしまに」には「ト

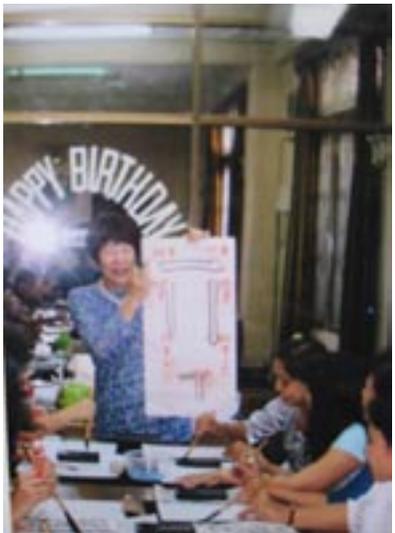
命短し 恋せよ乙女 赤き唇あせぬまに……」となります。ほとんどの有名な和歌にはそれに合う現代唱歌があるので、みなさん歌をとっても楽しんでくださいますので、調子にのってバックには自作の絵を貼る習慣になりました。それがまた日本の歴史や情景を説明する材料にもなりました。私の日本語教育は全く日本語教育にはなっていないかもしれませんが、日本文化を理解してもらおう授業にはなったと自負しています。

教員の授業では「美しいひらがなを書こう」と題して、筆文字は、撥ね・払い・止めなどの細かい文字の決まりを理解しやすいのです。昔の中国の書写教育の「九宪法」で、ひらがなの字形を覚えてもらいました。この九宪法は、絵や文字を正確に拡大(縮小)する方法として便利なのです。九宪法のための用紙を作って差し上げましたら、みなさん見る見るうちに上手なひらがなになりました。効果抜群です。

学部の学生には「私の家族」「私の趣味」「私の夢」という題で原稿用紙一枚の作文を課題にしました。内容よりも、原稿用紙の使い方とか日本文の書き方を細かく指導することになりました。ときどき日本では考えられないような書き方になるのが不思議でした。「……しません。」の「せん」とか、「ミャンマー」の「ミヤ」が一つのマスに横書きで入っているのです。が、私がミャンマー文字を勉強して初めてその理由が分かりました。ミヤン



ミャンマーのパウダ



ミャンマー人の初めての書道講座

マー文字では一字になる文字でした。最後には「日本に手紙を書こう」という課題にして、私の学生時代の友人の住所録を配って、それぞれ希望の人に手紙を書いて投函したのです。が、そこがミャンマーですから、3月20日に投函したものが5月10日現在で、まだ100分の7通しか届いていません。ヘンな国です。その後サイクロンの災害に見舞われたので、どうなることやら分かりません。ミャンマーから出国していないのかもしれませんが、大学の前にもポストがあります。そのポストは一月に一度くらいしか集めに来ないそうです。いろいろな郵便物を確実に送るのには、高額ですがEMSとかDHLの宅配業者に頼るしかありません。政府の機関は全く信用できないお仕事ぶりです。

食べ物は、なにしろ脂っぽいものばかりです。唯一まじなのが「タミンジヨウ」というチャーハンです。白いご飯には何でも混ぜて食べる習慣です。ある日、行事の打ち上げパーティがありました。いろいろな手料理がホテルのバイキング風に並んでいました。ボールのような食器に、ご飯やきそば、野菜炒め・から揚げ・ビーフン炒めなど何でもに入れて、調味料も置いてあるものを自分で混ぜるので、その混ぜ方が豪快なのです。皆さんに薄いゴム手袋が配られて、それぞれ自分の手でグチャグチャに混ぜるのです。日本人の私にとっては、なんとも食欲が失われる光景でした。ご飯やそばに味がしつかり滲みるようにとみっちりコネコネしているのです。「日本人は目で食べる」という文化を学生に教えていらつやる先生方ですが、本当に理解されています。それは私の調味料の選び方が悪かったのです。何しろ10種類くらいも色とりどりの粉が置いてある中から、辛そうな赤いものと緑のものはちょっとだけにして一応全種類入れてみました。でも私は手で混ぜるのは辞めておさじを使いました。「どーお？」って聞かれて、「うーん？」

と首をかしげましたが、でも全部食べましたよ、お祝いですから。宿舎は外国人向けの寮です。近くに外国語大学以外にも経済大学や医大があります。すべて旧ヤンゴン大学の学部だったのです。日本では大学を統合しているのに、ここでは分割しています。ミャンマー政府は大勢の学生が集結するのを恐れているのです。その寮は、鉄筋の二階建てで一応快適です。絨毯を敷いた6畳ほどの入り口部屋と10畳くらいのベッドルーム、同じくらいの広さの大理石床の台所、それにバスルームがあります。困ったことはシャワーです。瞬間湯沸器は付いているのに点かないのです。でも主人と息子が来たときになんとか修理してくれました。要するに水圧が足りないのです。近くの水道タンクから大量の水が24時間ジャージャー漏っているからかも知れません。ヘンな国です。シャワーだけでは物足りないで、ペーパーバスを買ってきて置いています。もちろん小さく買ってきたものがまた快適なのです。すぐにお湯が満ぱんになるところが気に入っています。これで快適と思ったのですが、排水口が便器の後ろにある構造には参ってしまいます。その上傾斜が逆なので、だまって見ているとバスルームの入り口付近にプールができます。バストイレですから一刻も早く排水

しないと困るのです。それをデッキバラシで戦うのが毎日の日課です。こんなことに毎日一番時間を取られています。日本のミャンマー大使館は品川にありますが、全く本国と同じタイプで日本人の響きをかっけています。午前9時〜12時は閉まってしまうというのです。本当は忙しい日本人には、このピンポイントしか受け付けない窓口には怒りがこみ上げますが、これがミャンマー方式です。ミャンマーに住んでいると、急ぐ気分は消滅します。自分だけ急いでいても仕方ありませんから。

しかし急がなくてはいけないものもあります。バスや列車に乗るときです。バスはほとんど止まりません。飛び乗る技が必要です。お客さんが多いところではしばらく停車しますが、最後のお客さんがステップに足を掛けたとたんに発車します。私は何度も振り落とされそうになって、車掌さんに引き上げてもらいました。それで身に着けた技は、足を掛ける前に手を掛けるのです。先にどこかにつかまってから、ステップに上るのです。私もかなりミャンマー人らしくなりました。列車は駅に着くと止まろうとして、なぜかゆりかごのように前後にしばらく揺れています。でも後ろから押されまのでやはり止まる前に飛び降りなければなりません。ヤンゴン市を一周している山手線のような列車はのんびり走りまわすから一周4時間くらいかかります。でも

市場に並べる大きい荷物を運ぶ人々で満員です。荷物の大きさも米俵2つくらい、布袋を縦につないだような物を3つも4つも積み込めます。そのためにバスではなく超不便な列車にするのですから文句は言えません。バスやタクシーはほとんど日本車の中古、いや大古車です。殆ど内装はありません。鉄板がむき出しでときどき穴も開いています。メーターはありませんから、乗る前に自分で交渉するのです。歩いて30分くらいのところ、日本円の100円程度です。

人間は3ヶ月位で全く慣れるものですよ。初めは何をそんなにビックリしていたのか分からなくなってきました。それで日本に帰国して今度は逆カルチャーショックというのを味わっています。

ミャンマーでは道は半分ずつ渡らなければ大通りを横切ることできません。まず中央線まで進んで、反対車線の車が切れるのを待って横断する技ですが、東京ではとんでもない行為なのでした。中央線で待っていたらすべての車が止まってしまっただけでした。

中国語科の中国人先生は、以前にも赴任したことがあって事情をよく知っています。ミャンマー政府の悪口をいつも言っている、夜中に寮で襲われて連れ去られるのだそうです。彼女が言うのは「それでおしまい」なのだそうですけど、連れ去られた本人はそれでおしまいとはいかないでしょう。平和ボケの私も、かなり緊張感が持てるようになりま

した。ときどき夜中にドスン！と大きな音がするのですが、それは椰子の実が屋根に落ちたのです。私だって、分かっていれば連れ去られるようなヘマはしません。

若い母親の教員がマンダレー外国語大学に転勤命令が下りると、泣く泣く単身赴任をして行きます。ミャンマーでは、国家公務員の退職には罰金を支払うそうです。退職金が支払われるのではなく、25年勤めて晴れて罰金なしで辞められるのだそうです。外国人との結婚にも罰金が必要で、外国留学にも大変な手続きがあって、話しを聞いていただけで留学を辞めたくありません。

12月から5月までは、ミャンマーは乾季でほとんど雨は降りません。ミャンマーのお正月は4月ですから、世界の年末年始のムードはありません。1月1日もごく普通に働きました。1月でも日中は死ぬほど暑いのですが、夜は涼しくなります。3月半ばころから本格的熱帯の真夏になり、4月5月が夏休みです。今夏休みで、私は一時帰国しています。6月1日に戻る予定です。

ミャンマー人は温度計を見る習慣がありません。が、私はいつも温度調べをしていました。ミャンマー人は寒いのが一番の苦手なようです。私が快適と感じる日本の5月くらい気温だと、冬物のセーターやその上厚手の襟巻きまで巻いて、「今日は寒いですねえ」とご挨拶されるのですが、「はあ？そうですかあ？」

とわけの分からない返事をしていました。1月ごろにはそんな日が何回かありました。3月になってからは35度くらいだったところが翌日には38度になって、ついには42度になりました。私はそれを見ただけでも気分が死んでしまいました。「トああー、北国に帰ろかなー、帰ろかなあー」と大声張り上げてストレス解消していました。

初めの1ヶ月間で、あまりの乾燥と埃で喉を壊してしまいました。それで私は一人密かに雨乞いをしていました。そうしたら、なんと降ったのです。「乾季には雨は降りません」と教えてくださった先生が、「ごめんなさい、降りましたねえ」と私に声を掛けてくださいましたので「いいえ、先生が間違ったことを言ったのではなく、私が雨乞いをしたのです」と言うのと「どうするのですか？」と聞かれました。それで私流の雨乞いの儀式を教えて差し上げました。それから2・3日してから、なんとまた一日中雨の日がありました。ひよっとして私の雨乞いは、本当に効くのかもしれないと半信半疑になりました。しかしそれを最後にもう仏様も温情をかけてはくれなくなつたようで、また暑い暑い埃っぽい日が続いていました。

今回のサイクロンもまだ暑い盛りですから、家を失った方もなんとか耐えていらつしやるようです。大学の構内はマングローヤヤシの大木に覆われていました。が、全部倒れているとメールがありました。

た。大学は、被害の大きかった海からは離れていますので、学生も教員もみなさん無事が確認できたようです。

その中で全くの茶番劇の憲法信任投票が強行されました。国連のガンバリさんがミャンマー入りするたびに、鉄砲を持った兵隊さんが大学周辺に並びます。学生運動を恐れているようですが、兵隊さんの鉄砲のほうはずっと恐ろしいのです。この投票で軍事政権が永遠に信任されることになってしまいました。

今回の災害の救援物資も、ほとんど被災地には届かないだろうと思います。大学は軍事政権の管理下にあります。賢明な教員と政府の監視役の教員が入り混じっています。身を守るため、私も政府の宣伝文句を日本語訳する手伝いをしていきます。

ほとんどのミャンマー国民は、親日的で我慢強い性格です。私はミャンマーの国民が好きになってしまいましたから、老後はこの国の国民のために捧げたいと思っているのです。

福田美鈴 (ふくだ・みすず)

- 1948年 東京都生まれ
- 1972年 東京学芸大学書道科卒業
- 1972～1974年 東京学芸大学付属大泉中学教諭
- 1974～1976年 静岡県立高校国語書道講師
- 1976～1999年 信愛学園国語書道講師
- 2002～2007年 浜松学芸高校(旧信愛学園)芸術科書道課程講師
- 2007・12～ ヤンゴン外国語大学日本語科講師

ラオス・パーナム村の学校

文・写真 田村怜奈

どうも。前回、タイの小さなワンタム
ーア村での体験記を書かせてもらった田
村怜奈です。再登場です。十二月号をま
だ読んでいらっしやらない方は、お願い
です、泣けて笑えて素晴らしいので読ん
てください。今回はその後ラオスの小
さなパーナム村へ渡ったときのことをお伝
えます。



タイ出国前に撮影。目下に広がるはメコン川。
おにいさんたちは、いったい一人でいくつの
スーツケースを運んでいるのだらう。一段一
段が高い階段を下りるだけでも私は怖いのに、
彼らはそれを数十kgの荷物を持ちながらト
ン下りてゆくのだ！

ラオスはタイのイサーンより、もっと
もつと貧乏だった。前回書いたように、
同じタイ国内でもイサーンとバンコクで
は、建物も人々の暮らしもまったく違っ
た。が、世界最貧国の一つであるラオス
にはさらに別の景色が広がっていた。こ
こ踏んじゃいけないのかなあ：床板の穴
がちらほら見えてしまう船の中、見て見
ぬふりを貫いてメコン川を渡って、タイ
からラオスに入国した。

☆★タイからラオスへ

船を降りてもやっぱり気持ちのよい
風。さつきまでいたメコン川の向こう
側を見つめてみる。気づいたらバスボ
ートに一つスタンプが増えているのだか
ら、なんとも緊張感のいらぬ静かな入
国だ。けれども異国の地がすぐに私の意
識を覚ました。周りを見渡しても何もな
いや。建物も古く、ガランとしていて人
の気配もしない。水の向こうにはショッ
ピングセンターや立派な寺院が建ち、き
れいな道路が続いていて人も大勢いるの
に。柵も何もなくて、泳ごうと思えば泳
がせてくれる私の前に流れるこの川。せ
せらぎの放たれる国境が形成してきた現
実を間近で見ることができた。

☆★ラオスの道をゆく

ちなみにタイは右ハンドルで、ラオス
は左ハンドルだ。バンコクの高速道路の
姿とはかけ離れているラオスの道路。舗
装されていないから、車で走っていると
車内でジャンプしちゃうほど揺れる。寝
たら舌を噛む危険と隣り合わせなので、
長旅だって寝てらんないや。寝ようとし
なくてもちよつと油断して気を抜こうも
んなら車の天井にボンボコ頭をぶつけ
る。あれは防ぎようがなかった。ラオ
スはフランスの植民地だった歴史を持
つ。道中、ラオス語とフランス語表記の
建物が見えた。それらを通過し、またし
ばらく進む。両脇に依然として地雷が埋
まっている道も走ったけれど、最低限の
舗装しかなされていなかった。私はなん
て平和な国から来たんだろう。

☆★ご対面

メコン川流域のホテルを出て、でこぼ
こ道を走ること三時間弱。何回車の中
で頭をぶつけたかわからないけれど、と
にかく、風が吹いたら飛んでしまいま
うな家々が見えてきた。ラオスに来た
目的、パーナム村に到着だ。初めて見る
外国人グループを、村の人々は温かく迎
え入れてくれた。小さな学校の隣にある
小さな部屋も学校の一部分かと思ったらそ
っちは村の集会所だった。扉のない入り
口から入ってみんなの方を向いて座る。
一九九九年、この村に初めて唯一の学校
が建設された。つまり、今この集会所に



集会所にて

座っているほとんどの人たちは読み書き
を習っていない。前列からおじいちゃん
たち、おじさんたち、おばあちゃんたち
の順番で座っている。若い人々やこども
は入りきらないので、部屋の外から、外
人を見ようと取り囲むようにして垣を
作っていた。タイの村でもそうだったけ
ど、建物に窓がないからね。外からでも
簡単に見えるわけよ。皆さん緊張の面持
ち。私はドキドキ。すごく暑いのに、お
じいちゃんたちはYシャツやジャケット
を着ている。若いくせに半袖Tシャツの
私は申し訳ない気持ちになった。こども
も大人もときどき目を逸らしながら、こ
ちらを見ている。ラオスの人にとってタ
イ語は方言みたいなものなので通じるけ
れど、私はワイ（合掌）をしながらラオ
ス語で挨拶した。やっぱり皆さん喜んで

くれた。人間なんだもの、言葉で伝えな
きや。日本から背負ってきた鉛筆等を渡
すときに、皆さんが拍手ではなくリズム
をとりながら手拍子をしていた。これが
ラオス式なんだろうね。

★☆☆キラキラと光るこどもたちの笑顔

パーナム村で授業参観だあ！窓もドア
もない校舎で汗をかきながら授業に取り
組む先生とこどもたちの姿に今まで感じ
たことのない思いに駆られた。それまで
は情報として知っていた現実が目の前に
あった。来れてよかつた！こどもたち
は自転車や徒歩で通学している。四、五
キロ離れた家から通う子もいる。日本で
見るような黒板なんてない。薄い木の板
を四枚つなげたものが壁に寄りかかって
ただけ。きつと私とさほど年齢の変わり
ない先生が、青いペンで絵を描いたA4
サイズの紙（ノートを破ったもの）を掲
げている。手作りの教材をみんなに見え
るように持ち上げた先生は「女の人は何
人いますか？」「これは何？」「鳥は何
羽？」「鳥はどう書く？」とこどもたち
に尋ねながら、優しく、丁寧に教えてい
く。高いビルなんてない所だからみんな
目が良い。教室の後ろの子にもちゃんと
絵が見えていて、先生の質問に元気よく
手を挙げて答えている。あらゆる道具が
揃っている日本の小学校の授業とは大違
いの光景だけど、にこにこ顔の私をちら
ちら見る度に照れちゃうみんなの目は輝
いている。緊張しまくりの先生は、「次

は何するんだっけ」と頭をかきながら焦
って右往左往。背中が汗でびちよびちよ
だ。村に初めて外国人が来ただけじゃな
くて自分の授業を見るんだから、そりゃ
緊張するわな。村ではこの先生以外に若
い人をあまり見かけなかった。都会に出
稼ぎに行っている若者が多いからだ。こ
の先生は、日本の教師志望の若者のよう
に大学へ行って教員免許を取得したわけ
ではなく、近くの村の高校を出て自分の
村に戻ってきてこどもたちに勉強を教え
ている。若き先生の村を思う情熱に胸を
打たれた。一年生クラスの生徒の年齢は
バラバラ。兄弟で参加している子もいる。
鉛筆やペンがない子、教科書がない子も
いるし、ノートを持っている子はすく
少なかった。教室の数も教師の数も足り
ないから、自習しているクラスもあった。
一つの教室に反対側を向いて自習クラス
と授業クラスが共存していた。

校長先生に「来てくれてありがとうご
ざいます。皆さんが長生きできるように
祈っています」と言われ、涙が出そうに
なった。泣いている場合じゃねーよ！ペン
も紙も足りていないけれども笑顔で懸命
に勉強するこどもたちから、知識以外の
ものも与える教育の大切さをまたまた教
わった。

★☆☆ハッツ

ある生徒の自宅を訪ねた。その子と六
人の家族は、大勢で歩き回ったら床が抜
けてしまいそうな家に住んでいた。以前

住んでいた村に伝染病が広まり、おじい
ちゃんとおばあちゃんが亡くなった。伝
染病から逃れるためにその子は家族と三
キロ離れた所から一頭の水牛と引越



先生の持つ紙切れにみんなで注目



勉強中

てきた。その一頭の水牛とこの家を交換
し、新しい地での生活を始めたばかりだ
った。日本から同行した誰かが聞いた。
「二日何をしていいよと言われたら何
をした？」その子の答えは、「畑仕事」。
十二歳の四年生は、お父さんに教えても
らったどんな仕事も、もう一人で行ける
んだ。ハッツというあだ名の、しっかり
者のハツサデーは、妹たちにラオス語
も教えてあげているんだって。



右手に見えるのがハッツのお家

☆☆ラオス人

ラオス人はシャイだ。タイ人の友達か
言っていた通り、とても暑いのに大勢が
長袖姿だった。タイの歓迎会では老若男
女問わず踊っていた。一方、ラオスの人
たちは「どうぞ前に出て、みんなの前で
踊ってください」と言って私を踊らせる
ものの（一人でもやっぱりあんなは踊る
んかい！）、彼ら自身はタイのみんなの
ようには踊らなかった。彼らはまるで、
踊ってくださいと頼まれたときの（はい、

私以外の)日本人のようだった。唯一ノリノリだったのはベロベロに酔っ払ったおっちゃん一人。どこの国にも例外はいらねえなんて思いながらおっちゃんに親近感。おっちゃんは、怪しい色した酒の瓶を持ちながら、ぶらぶらみんなの間を踊り歩いてゆく。汗だくになりながら授業を見せてくれた若い先生も、案の定おっちゃんにつかまり無理矢理飲まされ、「びよええ〜」って顔をした。おっちゃんが放つ強烈な酒のにおいで、踊りながら酔ってしまった私の頭は割れそうなほど痛かった。

ところで、日本で妹と叔母さんから特訓を受けて、たくさん持っていたあやとりが好評だった。バイシー・スー・クワン(歓迎の儀式。旅の安全を願って私の腕に幾重にも白い糸を巻いてくれた。詳しくは十二月号を参照のこと)で腕に巻いてもらった白糸の上にぐるぐる巻きにして準備していた色々のあやとりはあつという間になくなった。逆にあの酔っ払ったおっちゃんが手品あやとりを教えてくれて盛り上がった。一緒に笑った時、人間に生まれてよかったと心底思った。(みんなは笑っちゃうほど覚えの悪い子だなと思っていただけかもしれないけど。)

☆★PARTナーシップ

日本がODAで援助してきたタイが、今では日本とPARTナーシップを組んでラオス・ミャンマー・カンボジアを援助



何度教わっても覚えのない私に教えてくれる

する立場にある。自国の成長を見つづけるタイミングが来たら援助する側へまわるのは重要だ。タイには舗装された道路や空港があるから日本の企業は喜んで進出してくる。でもラオスには舗装済みの道路や空港だけでなく、電気や水道も通っていないところが多いので海外の企業がなかなか進出してこない。だからラオス人の雇用のチャンスが増えない。そのためラオスとタイの格差が広がる。ラオスが貧しさから抜け出せない図ができあがっちゃうんだなあ。

日本が今まで技術教育したことをラオスに伝える際には、日本が直接援助するよりもタイが先導しておこなう方が地域・言葉の面でも円滑に進む。先述した

ようにラオス人がタイ語をほとんど理解することが活かされ、タイ人の教師がラオスに赴いて疾病予防等の教育を進めている。東南アジアの経済成長と安定のためにもタイに期待がかかっているというわけだ。

☆★コブチャイライライ! ありがと!

外に続く風景は、赤い土と頼りない植物だった。鼻をかんでみたら、真っ赤!で、中学以来出ていなかった鼻血が、まさか初訪問のラオスで出たのかと思ってビックリした。村には水道も足りていない。地下水はあるのに水を汲み上げる機械がないからだ。水不足の村の赤い土壌では、木も植物も育つのが難しい。そんなこと、村に着いて車を降りて見渡せばすぐに判断できた。緑が続く東京の表参道や、日本の田舎の緑土とはかけ離れたような大地が広がっていた。木が少ないから地面にふりそそぐ太陽の光が直接自分の肌に戻り返して二倍の熱を感じる。我々の旅の安全を願ってくれたバイシー・スー・クワンの後に村の人が出してくれた料理は保存食のように調理されたかたい肉と魚ともち米だった。野菜がなかなか育たないこと、手に入らないことがわかる。米不足が問題のこの村の田んぼには灌漑もない。料理を前に「食べなさい、食べなさい」と言ってくれる村のみんな。みんなの温もりがまだ残る白糸が巻かれた腕を、目一杯振ってお別れを

した。ここで学んだことを日本に帰ったら多くの人に伝えなきゃ。みんなの温かい心について絶対にお礼をしよう。相変わらず揺れの激しい帰りの車の中、心に誓った。

経済大国と呼ばれるようになって久しい日本には、物があふれている。食べ物もあふれている。いろんな欲だつてあふれている。でもこれは与えることができるといふ意味に転換できるはずでしょ。かわいそうだなあと、違うんだなあ、とか思うのもいいけどさ、思ったら自分のできることを見極めることが大切。私が訪れた学校の生徒たちの教育費は寄付金でまかなわれている。素晴らしいねえ。お金をたくさん持っているのにお金の使い方がわからない人は、自分の豪邸に噴水をつける前でも後でもいいから寄付をして、貧乏学生は歩いて聞いて読んで世界の実情を知ろう。知ったことは伝えよう。伝えてもらった人もまた別の人に伝えよう。少しずつでもいい。人それぞれでいい。何だついてもいい。マイナスじゃないのだから、それは確実にプラスになつていく。

田村怜奈 (たむら・れな)

大学院生<旅する物書き>。「私をしょもない奴だと思ふその時間を、どうか世界平和への最短の道を考えるためにつかってください。」